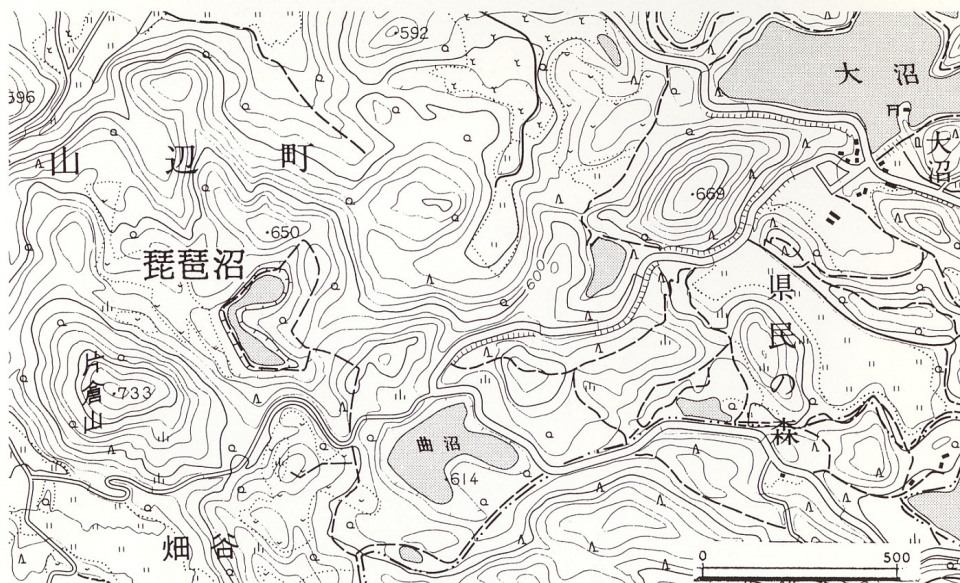


琵琶沼はみんなの宝





雪どけ水でいっぱいになった5月の琵琶沼



琵琶沼（国土地理院25000分の1地形図 白鷹山より）

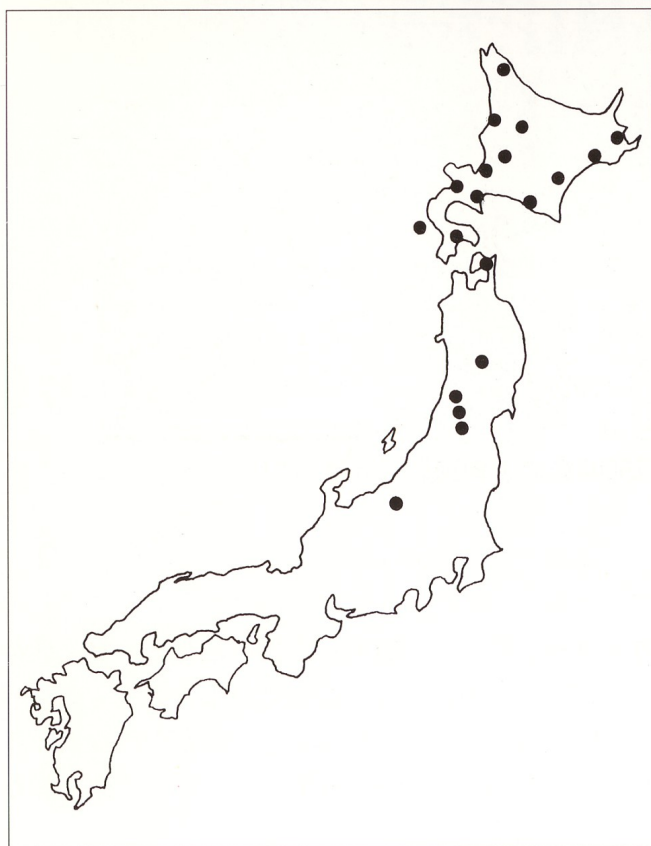
ホロムイソウとヒメカイウの発見

県民の森にはたくさんの池や沼がありますが、これから紹介する琵琶沼はいちばん北のおくまったところにあります。道路からはずれているので県民の森に行った人でもこの沼を知らない人が多いのではないのでしょうか。沼は「くの字」型に北沼と南沼がつながっています。北沼が日本の古い楽器である琵琶に似ていることから琵琶沼とよばれるようになったのでしょう。

1970年（昭和45年）9月、琵琶沼でたいへん珍しい植物が発見されました。ホロムイソ



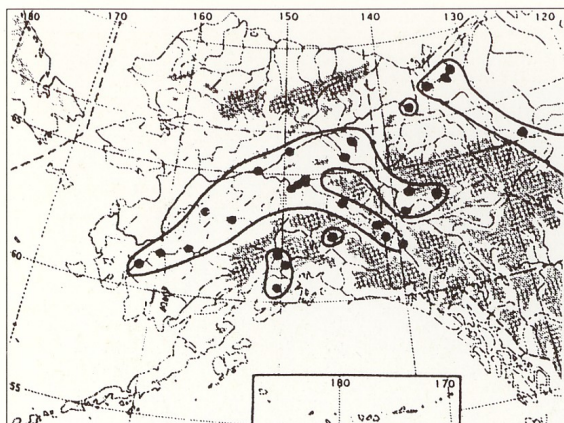
沼の西の岸边に咲いたヒメカイウの花



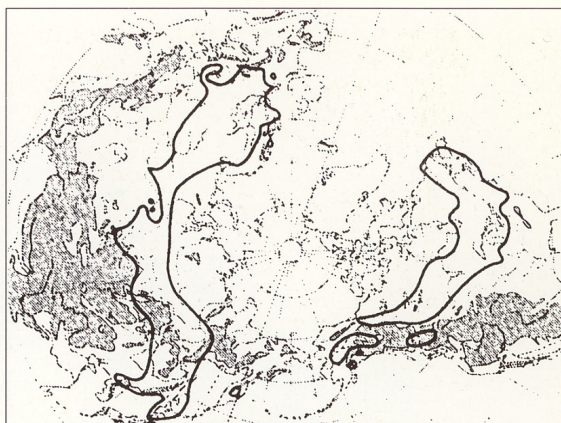
ヒメカイウの分布



ヒメカイウのスケッチ (フルテン)



アラスカのヒメカイウの分布



ヒメカイウは北極をかこむように分布

ウとヒメカイウです。この2つの植物の珍しいわけはあとから書きますので、まず発見のいきさつを話しましょう。植物を発見したのは武田 剛さんと庄司清裕さんで、二人は小学校の先生ですが、そのときは教育委員会から派遣されて山形大学で理科の研究をしていました。発見した日、二人の先生は山形市の近くで小学生に野外で理科の勉強させるのによい場所はないかと、県民の森の中をさがしていました。

琵琶沼にきたとき、ミズゴケ湿原の花の時期はもう終わっていましたが、その中に今まで見たことのない草を見つけました。そして植物にくわしい結城嘉美さんにみてもらったところ、その植物は東北地方に数カ所しか生えていないホロムイソウであることがわかりました。

ある日、結城さんたちが琵琶沼にきてホロムイソウをくわしく観察しました。そのとき第2の発見ともいえるヒメカイウが見つかったのです。この植物も東北地方には大変すくない貴重な植物です。

ヒメカイウ

ヒメカイウは琵琶沼では、雪どけ水で沼に水があふれそうになる4月の終わりごろ、ミズゴケの間や水面から芽をだしてきます。そして5月中ごろには写真のような花が咲きはじめます。

白い花びらのように見えるのは、苞（ほう）といって花のまわりをかこんでいるものです。花はほうにかこまれて肉質の花穂があり、短いおしべとめしべをもった花がたくさんついています。葉は心ぞうの形に似たハート型で先はとがっています。

どこかでこれに似た花を見たと思うでしょう、ミズバショウですね。ミズバショウもヒメカイウもサトイモ科の仲間です。花は6月には終わり、緑から赤にかわるしょう果が熟します。鳥たちにとってはこの実がおいしいのか、すぐに食べられてしまいます。

琵琶沼でヒメカイウが多く生えているのは、沼の西にある畑から沼に下りてきたところと、北沼の東の奥、南沼の南のへりの中ほどです。沼の西よりの畑に近いところのヒメカイウは、畑から流れこむ肥料の影響のため、よく育った大型のものをみかけます。

ヒメカイウはたいへん珍しい植物であるといいましたが、そのわけを説明しましょう。



沼の東奥のミズゴケの中から花を咲かせているヒメカイウ

日本地図にヒメカイウの生えているところを記入しました。北海道では全体に広く分布していますが、本州ではわずかに6か所だけです。北から青森県、岩手県、山形県と長野県で、山形県では琵琶沼と大井沢の鍋沼、月山のふもとの3か所です。いちばん南の分布地は長野県の志賀高原です。

このような分布のようすから考えられるのは、ヒメカイウは北に多くて、南には少ないので北方の寒い気候に適した北方系の植物ではないかということです。この問題をはっきりさせるために、もっと広く地球全体について調べてみましょう。

ここにあげたヒメカイウの分布図は、アラスカをはじめ北極圏の植物を研究したスウェーデンの植物学者エリック・フルテン博士がつくった地図です。ヒメカイウはアラスカの中中部や東部の広い範囲に分布しています。シベリアやヨーロッパはどうでしょうか。4ページの図は北極点を中心にしてかいた地図に、ヒメカイウの分布を記入しています。シベリア中部からヨーロッパ北部にかけて帯のように分布しますが、アラスカとあわせてみると、北極を中心^{しゅうきょく}に円をかくよう分布地がひろがっています。このように極のまわりに分布している植物を周極植物^{しゅうきょく}といいます。これでヒメカイウは北方系の植物であることがはっきりしました。

地球全体からみると、日本のヒメカイウの分布は指をさしたように南に下がった端にあたります。どうしてこんな分布をするようになったのでしょうか。ホロムイソウやミツガシワの分布と重ねて考えましょう。



ホロムイソウの花



ホロムイソウの果実

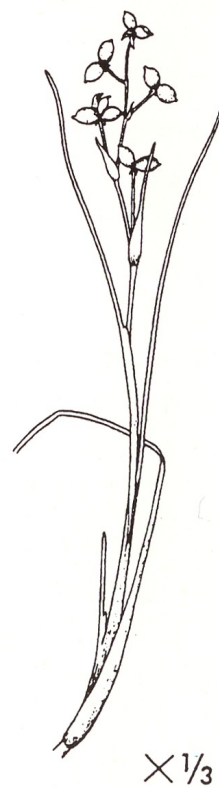


ホロムイソウも極の周りに多い

ホロムイソウ

5月から6月にかけて琵琶沼の水は少しずつ減り、水面が下がりはじめます。水をいっぱい含んだミズゴケの間からいろいろな種類の水草が芽をだして、つぎつぎに花を咲かせます。

6月に入ると、ホロムイソウも北沼のミズ



× $\frac{1}{3}$

ホロムイソウのスケッチ（フルテン）

ゴケの上にいっせいにでてきます。長さ10～30cmの細い葉の先より低いところに黄色の小さい花を咲かせるのですが、あまり目立ちません。花が終わって角ばった3個の果実ができるのは8月です。

ホロムイソウの分布図をつくってみました。北海道には多いのですが、本州はヒメカイウと同じように少ないです。山形県では琵琶沼のほかに朝日連峰の鳥原湿原に生えています。日本でいちばん南の分布地は京都市の深泥ヶ池（みどろが池）です。

日本以外の分布をフルテン博士の地図で調べてみると、ヒメカイウほどではないが、ホロムイソウも周極植物であり、北方系の植物であることがわかります。

ヒメカイウやホロムイソウのほかに琵琶沼には北の地方からきたと思える植物があります。ミツガシワもツルコケモもワタスゲもそうですが、ミツガシワについて調べてみましょう。

ミツガシワ

琵琶沼では2～3年前からミツガシワがたいへんな勢いで増えています。5月中ごろにはまったく水面が見えなくなるほど沼いっぱいに広がります。

ミツガシワの花は、花の茎の頂上にたくさんの白い花が咲きます。花はろうと形で5つに裂け、内側に毛があります。種子はまるくて平らで、長さ2～3mmですが熟するとたくさんの粒になって水面にうかんでいます。

ミツガシワで興味ぶかいのは、種子が化石になって各地の地層から発見されていることです。日本



ホロムイソウの分布



沼いっぱいに広がるミツガシワ

でいちばん古いミツガシワの化石は160万年前のもので、福島県から採集されています。そしてミツガシワの化石をたどっていくと、はるかに北のシベリアやアラスカにも同じ化石のでていることがわかりました。

160万年前といえば、このころから地球の気候は寒い氷期と暖かい間氷期とがくりかえしておとずれるようになりました。



ミツガシワの花



花は4つに開き、白い毛がある

氷河時代がはじまったのです。ミツガシワは寒くなった日本に北極圏からうつってきたのです。たぶん、ヒメカイウやホロムイソウも同じように北から南へきたのにちがいありません。

日本の各地の地層からミツガシワの化石は発見されていますが、いっしょにでてくる化石を調べるとつぎのようなことがわかりました。ミツガシワをふくむ地層は寒い気候のところに生えていたものが多く、その上や下の地層からは暖かい気候をこのむ植物が多いのです。これはながい間におこった気候の変化にあわせて植物が移動したからです。

いまの日本ではミツガシワは高い山の湿地に普通に生えていますが、低い土地の池や沼にもひっそりと生えているところがあります。関東地方や中部地方にもありますが、近畿地方では京都市の深泥ヶ池にも生えていて天然記念物として保存されています。こうした植物は寒い氷河気候が終わって、暖かい気候になった現在でも北にもどらず、生き残っているので「遺存植物」といわれています。琵琶沼のヒメカイウもホロムイソウも生き残り植物で、寒い気候の時代が日本にもあったことをしめす証人ともいえます。

武田さんや庄司さんの発見がきっかけになって、1978年（昭和53年）に、琵琶沼のミズゴケ湿原は山形県の天然記念物の指定をうけて保存されることになりました。

琵琶沼には氷河時代の生き残り植物のほかにも、たくさんの水生植物が生えています。みなさんがこの沼を訪ねるときの参考に、花の多い春から夏の植物のようすを紹介しましょう。

5 月の花

ゴールデンウィークのころはまだ花には早いのですが、中ごろになるといっせいに花が咲きはじめます。水生植物の保存のためにミズコゲ湿原の中には入らないで、沼にそった道からみてください。

琵琶沼でぜひ見ていただきたいヒメカイウとホロムイソウ、ミツガシワなどは5月に花を咲かせますが、その特徴はこれまで紹介しましたのではぶきます。

ワタスゲ

5月中旬ごろ、湿原のまわりの水面をうずめていたミツガシワの白い花にかわって、ワタスゲの白い綿毛が風にゆれながら湿原に白と緑の風景をつくります。スゲの花は綿毛よりも早くでて、黄色のおしべを穂先につけます。この花の白い糸のようなものは花ではなく、花被片（かひへん）といって花をつつんでいたものが、花の咲いたあと細い糸のようにのびたものです。ワタスゲは東北地方や北海道の湿地に多く、この草も北の植物です。

レンゲツツジ

いろどりの少ない湿原のあちこちに赤いツツジの花が咲きます。赤というよりは朱色に近いのですが、北沼には高さ1mぐらいに成長しているものもあり、色と高さで目立っている植物です。レンゲツツジのほかにも木の仲間が湿原に進出しています。アカマツ、ハイヌツゲ、イソノキ、ズミなどの木です。琵琶沼のミズコゲ湿原も将来は少しずつ乾燥がすすみ、今の浮島湿原から木の生えた湿地になり、ハンノキやサワグルミ、ミズナラの林に変わっていくでしょう。

ミズバショウ

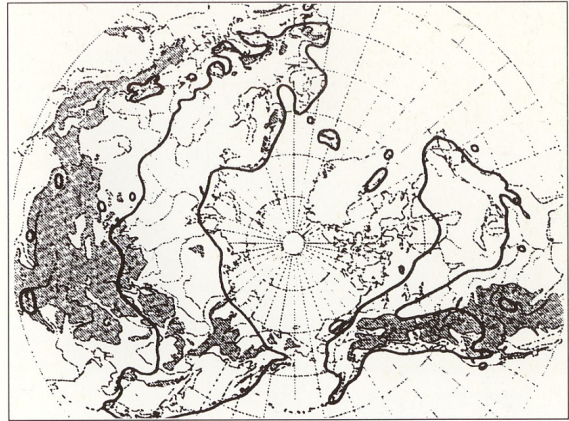
南沼の中ほどに数本のミズバショウが花を咲かせて、この沼にもわたしはいますよ、といているようです。県民の森やそのまわりの沢や湿原にはミズバショウはふつうに生えているのですが、むしろ琵琶沼では少なく少数派です。花はヒメカイウに似ていますが、葉は分厚くて形もちがいます。

ヤマドリゼンマイ

シダの仲間ですが、湿原の中で黄みどり色の直立した植物がポコポコと数本たばねてつたっているのによく目立ちます。シダはふつうの植物のような花はつけません。この時期のヤマドリゼンマイは栄養葉といって濃い黄みどり色のものが中心からでて高さ1mにもなります。

6 月の花

5月は大きいからだの植物の花が多かったのですが、6月はトキソウやツルコケモモなど小柄できれいな色の花が咲いてきます。



ミツガシワも周極植物（フルテン）



風に吹かれて白い波をうつワタスゲ



ワタスゲ



ワタスゲの棉毛



レンゲツツジ

ツルコケモモ

ミズゴケの間を細い茎がはうようにのびていますが、花が咲く6月になると、立ち上がり10cmほどの高さになり、ピンク色のかわいい花を咲かせます。長さ1cmぐらいの花は4つに分かれて、反りかえります。果実は直径1cmぐらいでまるく、熟するとあざやかな赤い色になります。草のようにみえるが、これでも木で、ツツジの仲間です。日本では高い山の湿地に多く生えていますが、アラスカやロシア、北ヨーロッパに多く、北方系の植物です。

トキソウ

きれいな色の花ですが、形も鳥が羽をひろげたようでしょう。最近まで日本にすんでいた美しい大型の鳥のトキから名がつけられました。日あたりのよい湿地に生えるラン科の植物です。南沼ではたくさん集まって生えているところがありますが、小型で高さは10cmぐらいです。

7月の花

梅雨が終わるころになっても、雨の少ない年には琵琶沼は7月から沼が干上がって、底の黒い泥が見えます。1992年と1994年は水がなくなりました。この月の花で珍しいのは小さい虫などを食べるモウセンゴケやミミカキグサなどの食虫植物が花を咲かせることです。

モウセンゴケ



ミズバショウ



ヤマドリゼンマイ

北沼の中ほどから東のはしにかけてモウセンゴケが生えています。葉の粘液とせん毛でつかまえた虫を溶かして、それを自分の養分にしてしまいます。花の茎は長く10~30cmもあり、根元の葉を確かめないと、モウセンゴケの花と気づかずに見落としてしまいそうになります。モウセンゴケは栄養分の少ない酸性の湿地や湿原に生えています。

ミミカキグサ

花のあと耳かきの形をした黄色のがくがみられるのでこの名がつけました。水中でも地上でも生活ができますが、地上にでてくる地上葉は1cmぐらいの非常に小さいものです。虫をつかまえる捕虫網は地中にはっています。ミミカキグサは南沼の中央から西よりのところに多く生えています。

琵琶沼には水中で虫をつかまえるコタヌキモやイヌタヌキモなどの食虫植物も生えています。

ヒツジグサ

沼の水面に白い花のヒツジグサがゆったりと浮かんでいるようすは9月までみられます。花のさいている期間はほかの植物にくらべて長いのが特徴です。しかし1つの花が咲いているのは2日か3日です。

8月の花

北沼のミズコゲ湿原は全体として水面より高いところにあり、こんな状態を高層湿原といいます。その水面も湿原とをさかいするようにすこし高まったへりがつづいています。このへりにそってコバギボウシやクサレダマが並んで生えます。



むらがって生えるツルコケモモ



ツルコケモモの花



トキソウ



南沼にはトキソウが一面に生えるところがある

コバギボウシ

全体の形からはユリの仲間であることは気づきにくいかもしれませんが、花と葉をみるとユリ科であるのがわかります。花の茎はまっすぐに立ち50～60cmになり、うすい紫色の花をたくさん咲かせます。

クサレダマ

50～70cmぐらいの高さに成長して茎の先に黄色の花をたくさん咲かせるので、遠くからでもよく目につく。この花の咲くころになると湿原の植物は実をつくって枯れはじめるものがふえてきます。

9月の花

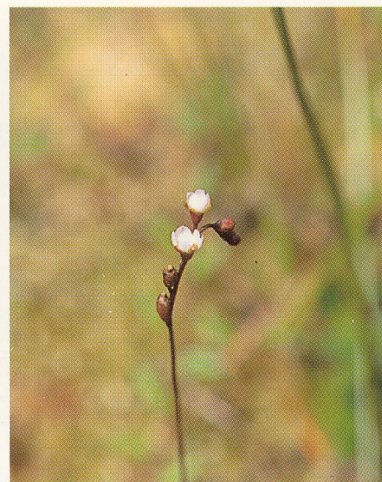
湿原では植物に少し枯れはじめるものがでて、秋の気配が感じられるようになります。

エゾリンドウ

9月に入って花を咲かせるのはヒツジグサなど水中のものはありますが、湿原の上ではエゾリンドウだけではないでしょうか。太い茎がまっすぐにのびて、50cmをこす高さにな



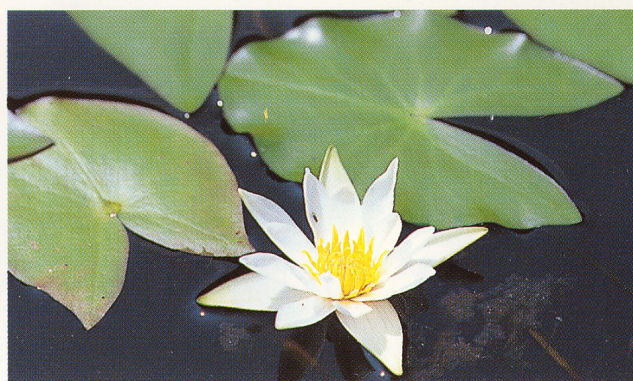
モウセンゴケ



モウセンゴケの花



ミミカグサ



ヒツジグサ

ります。茎の先に数個の紫色のつぼみをつけ、天気の良い日には花は開きますが、くもった日の開きぐあいはいくつかよくないようです。

琵琶沼の花ごよみ

この沼にはどれぐらいの植物が生えているのでしょうか。山形県立博物館が調べたところ、湿原植物が57種も生えていることがわかりました。みなさんの中で琵琶沼の植物をみようと計画をたてられるときの参考に花ごよみをつくりました。花ごよみのために観察したのは1993年でした。この年の気候は春は順調でしたが、夏は気温があがらず記録的な冷夏でした。しかし、琵琶沼のおもな植物は7月中までに花を咲かせますので、花ごよみとしてはいつもの年と変わらぬこよみができました。

この花ごよみにでてくる植物は、沼の湿原だけではなく、まわりの雑木林や沼をまわる観察路の植物もふくめてつくっています。

☆：開花期、●：結実期、✿：紅葉期

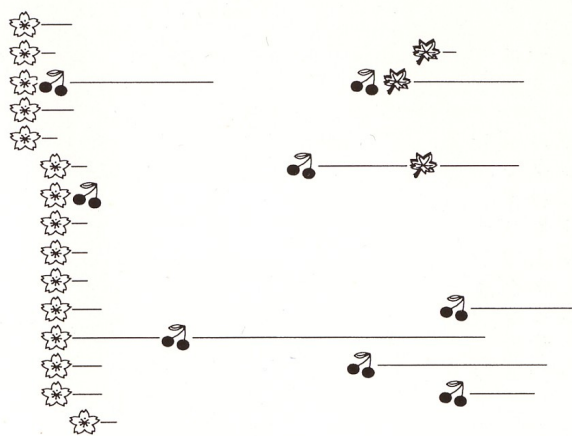
湿原のまわりの
花ごよみ

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
上中下上中下上中下上中下上中下上中下上中下上中
旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬

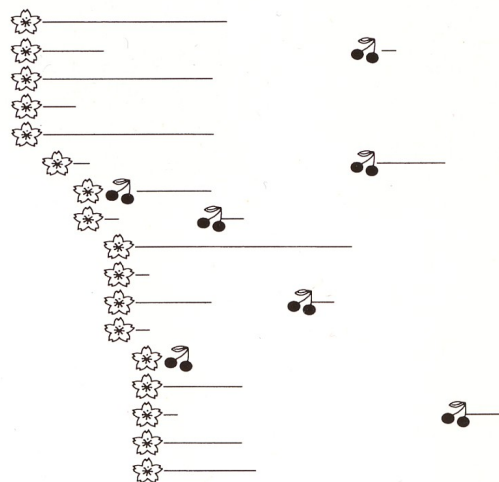
マルバマンサク
キブシ
アズマイチゲ
ショウジョウバカマ



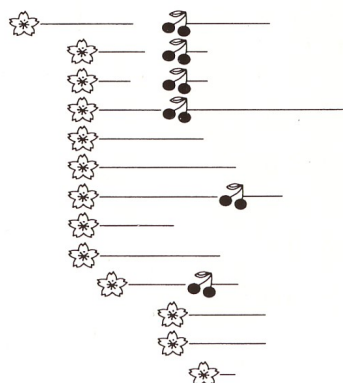
オオタチツボスミレ
オオヤマザクラ
オオカメノキ
ミヤマキケマン
タムシバ
ウワミズザクラ
モミジイチゴ
チゴユリ
クルマバソウ
ミツバツチグリ
ズミ
ハウチャクソウ
コバノトリネコ
ミズキ
ギンラン



ノリウツギ
ヤマボウシ
ヤブデマリ
カンボク
フタリシズカ
アマドコロ
ナワシロイチゴ
エゾアジサイ
キツリフネ
イチヤクソウ
ヌスビトハギ
オカトラノオ
ツルアリドオシ
シオデ
アクシバ
アマニュウ
オオイタドリ



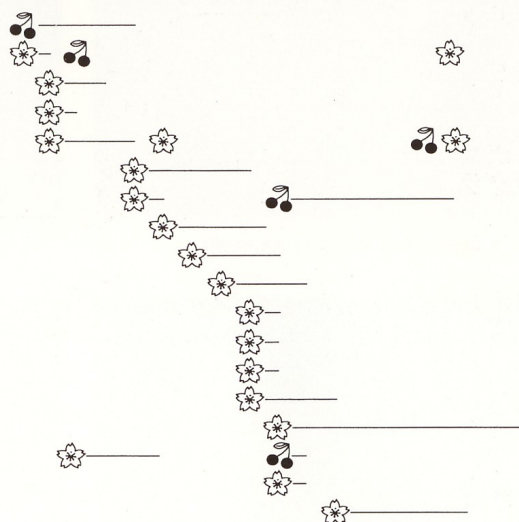
エゾボウフウ
ヤマユリ
クガイソウ
キンミズヒキ
アキノキリンソウ
ナンブアザミ
ミズヒキ
ミヤマウズラ
ムラサキツユクサ
カラハナソウ
ハナタデ
シオン
ナギナタコウジュ



花のこよみ

ワタスゲ
ミツガシワ
レンゲツツジ
ミズバショウ
ヒメカイウ
トキソウ
ツルコケモモ
モウセンゴケ
ヒツジグサ
ミカヅキグサ
クサレダマ
ヒメシロネ
ヘラオモダカ
コバギボウシ
ミミカキグサ
ホロムイソウ
ジュンサイ
エゾリンドウ

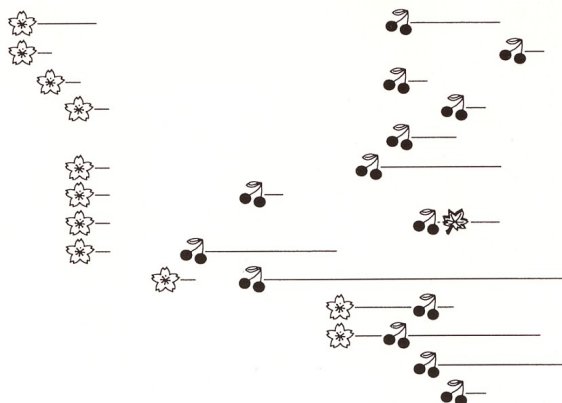
3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
上中下上中下上中下上中下上中下上中下上中
旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬



実のこよみ

オオバクロモジ
ツノハシバミ
ミズナラ
コナラ
クリ
マムシグサ
ヤマグワ
ヤマブドウ
カラコギカエデ
コマユミ
ナンバンハコベ
ノブキ
ツルウメドキ
ツルリンドウ

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
上中下上中下上中下上中下上中下上中下上中
旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬



紅葉のこよみ

イタヤカエデ
ウリハダカエデ
ヤマモミジ
ヤマウルシ
コハウチワカエデ

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
上中下上中下上中下上中下上中下上中下上中
旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬旬





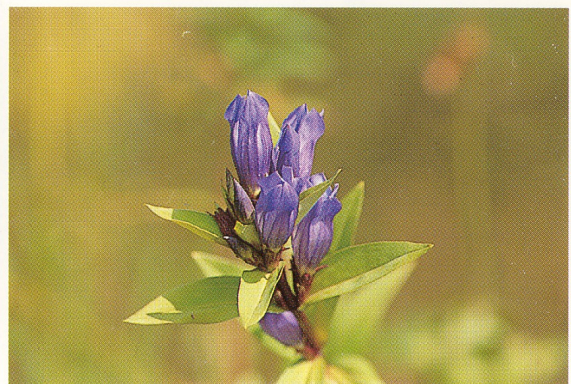
コバギボウシはユリの仲間



コバギボウシが並んで生える



クサレダマ



エゾリンドウ

琵琶沼の気象

植物が生きていくためには水や土もだいじですが、日光もたいへん重要です。わたくし達は1993年と1994年の2年間にわたって琵琶沼の気温や湿度などの気象観測をしました。沼のそばに百葉箱をたて、風力計をとりつける塔をたてたり、沼の水の増減を記録する水位計をつけたりして観測をはじめました。温度計や湿度計は自記装置のついたものですが、記録用紙は1週間巻きなので用紙の交換に毎週かならず琵琶沼に行きました。冬、大雪の日でもカンジキをはいて沼に通いました。

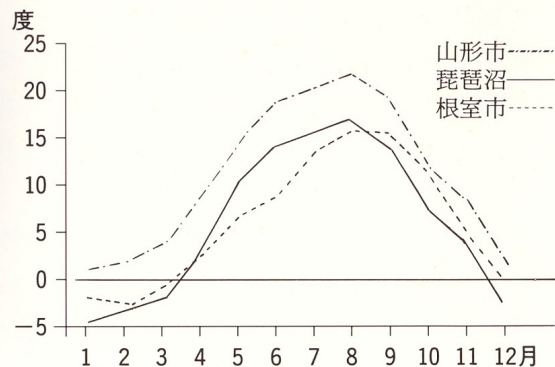
その結果、大変おもしろいことがわかりました。琵琶沼は山形市にくらべてうーんと気温が低いのです。1年を平均した気温は北海道の釧路や根室、網走とほぼ同じでした。

まず山形市の年平均の気温（1993年）とくらべてみましょう。琵琶沼の1年の平均気温は6.1度でした。山形市は11.2度で5.1度のちがいがありました。琵琶沼は山形市より450mも高いところにあるのですから、気温が低いのはあたりまえです。問題はその低さの程度です。

ふつう気温は高くなるほど下がりますが、高さで気温の下がり方にはあるきまった関係があります。高さが100m増すごとに、年温は0.65度低くなっていきます。これを気温変化率といいます。



真冬の気象観測



琵琶沼、山形市、根室市の1993年の月別気温

山形市よりも450m高い琵琶沼の気温は、2.9度低いと、気温変化率どおりですが、観測では5.1度も低く、その差は2.2度あります。

なぜ琵琶沼の気温は低いのでしょうか。

最初に考えたのは、昼間の時間が短いので日射量が少ないのではないかということでした。琵琶沼は片倉山をはじめ、まわりは山や丘にかこまれたくぼ地にあるので、日の出が遅く、日の入りが早いのではないかと。日射計で調べたところ、予想どおり山形市よりも昼間は短く、日射量も少ないことがわかりました。

次に琵琶沼の1年の平均気温6.1度はどこの地方の気温に近いかを調べました。おどろいたことに北海道の東のはしにある根室6.0度、釧路6.0度、網走5.9度でした。北海道の東部と同じ年平均だとわかって、ピンときたことがあります。

ヒメカイウ、ホロムイソウ、ミツガシワなど琵琶沼に生き残っている氷河時代の植物のことです。周極植物といわれる北方系の植物は暖かくなった現在でも北海道に残っていますが、北海道なみの気候である琵琶沼にも生き残れたのではないのでしょうか。

琵琶沼のミズゴケ湿原を守りましょう

このパンフレットをここまで読んでいただいた方には、琵琶沼の湿原を守らなければならない理由もよくわかりだと思えます。そしてわずか2ヘクタールほどの湿原ですが、この沼はわたくし達みんなの誇るべき宝である意味も説明できますね。

もう一つ付け加えたいのは、この沼には昔からの自然が残っていることです。生物は助け合ったり、競争したりしていますが、人間が手をつけていない自然は、その土地の気候や土壌などにあった形のしくみを長い間、時間をかけてつくりあげてきました。山形市の近くでほんらいの自然の見られるところとは聞かれば、琵琶沼を見ましょう、あそこは自然の記録の宝庫です、と答えてください。

武田さん達が琵琶沼にきた20数年前、もう一つ重要なことに出会っています。それは南沼の雑木林の木に刈りとられたミズゴケが乾燥のために掛けられていました。盆栽や園芸用にミズゴケが売られていたのです。さらに近くの畑に沼の水をくみあげる計画もすすん

でいました。琵琶沼の湿原を守るためにもう待てないと、山形県は沼を県の費用で買い上げて保存に乗りだしたのです。

琵琶沼を訪ねた人は、ぜひ北沼と南沼とをくらべてください。いったん刈りとられたミズゴケはなかなか元にもどっていません。北沼の豊かな植物の組合せに対して、南沼は貧弱そのものです。ふたたび南沼の悲劇はくり返さないようにしましょう。

このパンフレットを書くのにいろいろな本を参考にしましたが、とくにつぎの本から図や表を引用させていただきました。

『平成5年度琵琶沼緊急調査報告書（環境・植物）』山形県立博物館 1994年

『西部地域自然環境調査（報告書）』山形市 1990年

エリック・フルテン著『アラスカの植生』スタンフォード大学出版会 1968年

あとがき

私たちがはじめて琵琶沼を訪れたのは、1990年の夏の終わりでした。沼の東の尾根道から雑木林の道をくだって、目の前にミズゴケ湿原があらわれたとき、思わず歓声があがりました。ここまで歩いてきた県民の森は、どこにも人の手が入っていました。せまいけれども沼の水面をおおっているミズゴケ湿原は、大昔からの姿をそのまま引継いできたと語りかけているように思いました。

年が明けた1991年、山形県の許可をもらって、湿原の植物を調べました。つづいて1992年は水質を調べ、沼の西寄りには畑からの肥料の影響で、植物のからだは東寄りのものより大きく育っていました。

そして1993年は、気象観測を始めました。百葉箱をたてたり、風力計の塔をつくったり、栈橋をかけて水位計をつけたり、すべて私たちの手で装置をとりつけました。その結果、琵琶沼は北海道並みの寒い沼だとわかりました。毎週、観測の記録用紙をとりかえるので、その日は花暦のもとになる植物の調査もできました。気象観測は1994年もつづけ、沼の気温が低いのは日照時間が短いためであるとわかりました。

私たちには大学の授業や教育実習があり、沼にくる水鳥や昆虫などの調査は、時間がなくて調べられませんでした。それでも年に1つは新しい発見があり、その発見のよろこびが次の年の調査へとつづく力になったものと思っています。みなさんも琵琶沼を見守ってください。

この調査をすすめるのに、植物については竹村健一先生と碓井信久先生に指導していただき、日本生命財団から研究助成金をうけました。深くお礼を申し上げます。

1995年3月

前田 保夫

この本をつくるために調査に参加してくださったのは次のかたがたです。

相田陽一 芦野由美 石田純一 大江美和子 河内 昭 小森俊宣 斎藤信幸
渋谷千登勢 白木明美 高橋宏子 高橋雅隆 浜島貴子 堀 敬子 増川裕人
丸山千絵美 松本義文 武藤由紀江 目黒孝博 矢作佳代 山口史子 横沢睦子
山本正明 滝沢利直 長岡 哲

書名 琵琶沼はみんなの宝

編集 前田保夫

発行 山形大学教育学部

附属教育実践研究指導センター

特別出版物第2集

1995年4月25日

990 山形市松波2丁目7番4号

TEL・FAX 0236-24-2847

助成 日本生命財団

印刷 豊田太印刷所



5 月の北沼